

わが人生観 8 小林 秀雄

1969年 9 月30日 初版発行

定価450円

著 者 小林 秀雄

発行者 大 和 岩 雄

発行所 だい わ 大 和 書 房

東京都文京区関口1の33

振替東京 64227

電話(203) 4511~4

郵便番号 112

製版・印刷・信毎書籍印刷 製本・美成社

落丁本・乱丁本はお取替えします<換印略> ©1969

わが人生観⁸

小林秀雄

大和書房



鎌倉自宅にて 昭和43年4月
撮影・吉川富三

宣長ははく 十三年某の冬にモ、その
 いたずら、潮やはさへぐ、とよみ、ごとき、
 ふれ、深きことは、かへりてうけぐには、何
 の深きことよりも見之ぬものあり、その理
 事には見えて聞てゐるより、かの川の深
 報つ浪々さねにあり、まことには、文しも
 しか、らぬに、そのあれ、そこいふまじ
 かわらぬことわりある、いまうこし深
 おもはざるは、いかゞそや

目 次

私の人生観

私の人生観

美を求める心

常識について

自己について

自己について

文章について

道徳について

信仰について

考へるヒント

良心

歴史

13

78

90

139

143

150

157

163

171

目次

年譜	解説	無私	理想	教育	自由	中庸	無私の精神	哲学	言葉
	——無私を得んとする道——								
装幀 上口睦人	佐古純一郎								
237	229	223	220	216	213	209		194	183

わが人生観⁸
知性と感性

私の人生観

私の人生観

自分の職業の命ずる特殊な具体的技術のなかに、そのなかだけに、私の考え方、私の感じ方、要するに私の生きる流儀を感得している。

この前ここでお話しを依頼された時「私の人生観」という課題を与えられました。急病で御約束を果せず、主催者の方に御迷惑をかけたが、私としては、講演などするより、勝手に独り（ひと）で病氣でもしている方がよほど気が楽だった。今度は、不幸にして急病にもならず、どうも大変重々苦しい気持ちで、こうしてここに立たされているわけがあります。

どうも私は講演というものを好まない。だから、今迄にずいぶん講演はしましたが、自分で進んでやった事はまずありません。みんな世間の義理とか人情とかの関係で止むなくやったものばかりです。

私が講演というものを好まぬ理由は、非常に簡単でして、それは、講演というものの価値をあ

まり信用出来ぬからです。自分の本当に言いたい事は、講演という形式では現わす事が出来ない、と考えているからです。むろんこれは、私の勝手な言い分である。私の人生観から割出した結論である。政治家は、演説ではとうてい己れの政見は発表出来ないなどは考えない。ヒットラアの様な演説気違いになりますと、雄弁術というものが発達すれば書くという様な陳腐な表現形式は、将来大打撃を受けるであろうという様な事を「我が闘争」の中で言っております。人によって考えはいろいろであるが、まあ職業というものが別々なものだから、それでよろしいのでしよう。私は、書くのが職業だから、この職業に、自分の喜びも悲しみも託して、この職業に深入りしております。深入りしてみると、仕事の中に、自ら一種職業の秘密とでも言うべきものが現われて来るのを感じて来る。あらゆる専門家の特権であります。秘密と申しても、むろんこれは公開したくないという意味の秘密ではない、公開が不可能なのだ。人には全く通じ様もないあるものなのだ。それどころか、自分にもはっきりしたものではないかも知れぬ。ともかく、私は、自分の職業の命ずる特殊な具体的技術のなかに、そのなかだけに、私の考え方、私の感じ方、要するに私の生きる流儀を感得している。かような意識が職業に対する愛着であります。

天職という言葉がある。もし天という言葉をも、自分の職業に対していよいよ深まって行く意識的な愛着の極限概念と解するなら、これは正しい立派な言葉であります。今日天職という言葉がもはや陳腐に聞えるのは、今日では様々な事情から、人が自分の一切の喜びや悲しみを託し

て悔いぬ職業を見付ける事が大変困難になったので、多くの人が職業のなかに人間の目的を発見する事を諦めてしまったからです。これは悲しむべき事であります。

そういう様な次第で、私は書きたい主題は沢山持っているが、進んで喋りたい事など何にもない。喋って済ませる事は、喋って済ますが、喋る事ではどうしても現われて来ない思想というものがあって、これが文章という言葉の特殊な組合わせを要求するからであります。もし私に人生観というものがあるとすれば、そちらの方に現われざるを得ない。従って、私の人生観というものをもっともお話する事は、うまく行くはずがないから、皆が使っている人生観という言葉についてお話したい。

人生観人生観と解り切った様に言っているが、本当はどういう意味合いの言葉なのだろうか。

人生という言葉も観という言葉も、非常に古い言葉であるが、両方くっついて人生観というのは、古い事ではありますまい。少なくとも、この言葉が普通に使われ出したのは、ごく近頃の事で、やはり西洋の近代思想が這入って来て、人生に対する新しい見方とか、考え方とかが起った時から、人生観という言葉も盛んに使われる様になったのだと思う。しかしそれかと言って、人生観に相当する言葉は外国にはない様です。ある人の説によると、オンケイの *Lebensanschauungen* が人生観と訳されて以来、人生観という言葉が広く使われる様になったと言うが、*Leben* は人生だが *Anschauung* という言葉は観とはよほど違う様だ。観という言葉には日本